

中島みち

悔いてやまず

中島みち

悔いてやまず

著者紹介

中島みち

昭和28年、東京女子大学英米文学科卒、東京放送に入社。34年退社、フリーとなる。45年、中央大学大学院法学研究科（刑事法専攻）修士課程修了。新聞、雑誌に安楽死問題、医療制度等について、評論、ルポを執筆。49年より7年余にわたり、読売新聞に椿、風、椿風太郎のペンネームでテレビ、ラジオの週評を書き続けた。

著書「誰も知らないあした——ガン病棟の手記」（時事通信社）、「クワガタクワジ物語」（筑摩書房）、「灰色の奇跡——あるガンワクチンの真実」（講談社）「がん病棟の隣人」（毎日新聞社）他。

訳書 ベギー・アンダーソン著「ナース——ガン病棟の記録」（時事通信社）

悔いてやまず

定価 九八〇円

昭和五十七年九月三十日 第一刷
昭和五十八年一月三十日 第二刷

著者 中島みち

編集人 川合多喜夫

発行人 関根 望

発行所 毎日新聞社

東京都千代田区一ツ橋
一〇〇 大阪府北区堂島
五三〇 北九州市小倉北区紺屋町
八〇二 名古屋市名区
四五〇

印刷 中央精版
製本 大口製本

はじめに

夫、高橋照明の肺ガンが発見されたのは、昭和五十六年三月十九日である。入院は、その前々日。一度も家へ帰れぬままに、六月二十九日、死んだ。

百日と五日の闘病生活は、傍からは凄絶とも見えるものであった。だが、最期の瞬間まで頭の方は明晰で、しかも心の動揺を見せなかった彼自身にとって、それは果たして、まわりの人間の目にうつるようなものであったのだろうか？

いまだに、いや今にしています、私にも解らぬ部分が残されている。

それにしても、あんなに頑健であった彼が、何故五十代で死ななければならなかったのか？一口に肺ガンといっても、何故あれほどの肉体的な苦痛、しかも事前に回避し得た苦痛を負うことになったのか？ 乳ガンの手術後、ずっと早期発見を訴えてきた私が、何故夫を手遅れガンで死なせるようなことになったのか？ 私自身、幾度も幾度も、自らに問うては悔み、哭く日々を重ねてきた。

ただ、現代医学も、私たちも、まさにガンに翻弄され尽くしたとしか言えぬようなこのケース

を振り返り、一つだけ救いを見出す。それは、「死にかたは、その人間の生きかたである」という考えからはみ出すような、途方もない、不運な死にかたを、彼はしなかったと思えることである。

というのは、同じガンという病気を相手にするにしても、どうにも避け得ない形で、また早期発見のしようもないような場所を襲われて死んでいく不運な人が、世の中にはたくさんいるというのに、夫のケースでは、本人にも、妻である私にも、そしておそらくは医師たちにも、それぞれに、この、肉体的には無惨の極ともいえる死について、苦い自省の余地があると思えるからである。

また一方、発見と同時に既に手遅れも手遅れ、今日死ぬか、明日死ぬかというような状況の中にあつて、彼の死生観、患者としての生きかたと、医師たちやナースたちの姿勢が緊張感ある調和を保って、彼はある平安のうちに死に得た、と推測されるからである。

彼の死について書くことの意味を納得するまでに、かなりの時間がかかったが、それは対ガン運動への私の中の虚しさのためであつた。

十二年前、私は偶然に、それこそ紙一重の差で、手遅れガンで死ぬのをまぬがれた。それから私は使命感のようなものから、命の岐れ目となる貴重な時は如何に徒過されやすいものか、またせつかく本人が早期発見しても医療側の見落として手遅れになることが如何に多いか、を身近な人々の苦しい死をふまえて本にも書き、健康な人々に、医療従事者に、早期発見を訴えてきた。

それらが多くの方々に読んでいただけたのは事実だが、読者の過半数は既にガンに患ってしまった方々であるような感触がある。そして、健康であるのに読んで下さって、早期発見の重要性が肚に沁み込んだとまで言ってくれた人をはじめ何人の方が、その後手遅れガンに倒れ、入院後アツという間に亡くなってしまわれた。

その度に私は、「家の中の恥をさらして書いても、所詮、ガンなんて他人事（ひとごと）でしかないのね」と嘆いたものである。そんな時夫は、私の本を読んで早期発見し命を救われたと、連絡してきて下さった方々のことに触れ、人間が人間の命に直接影響を及ぼせるなどそうそうあることではなく、一生に一人でも人の命を救えたら素晴らしいことなのだと、私を励ましてくれたものであった。

そして、その、夫である。

彼は、私の作品のすべて、新聞に長年連載していた放送評論や医療関係の原稿にいたるまで全部目を通して批評してくれていたから、いつのまにかガンにもかなり詳しくなっていた。だが彼は、「この僕がガンにかかるはずがない」「こんなに元気でガンを疑うなんてバカげている」と、彼の咳に肺ガンを疑う私の言葉に全く耳を貸さなかった。

私もまた、医師たちに幾度も「主人は肺ガンではないか？」と不安を告げながらも、その疑いを否定されると、それ以上はつい遠慮してしまつて突つ込めなかった。医療についての公けの仕事の上ではかなり厳密に追究するほうであるだけに、私的なことになると、仕事上使っている名も使わず、却ってそのぶん控え目に控え目にと、努めてきた生き方が、裏目に出たとも言えるか

もしれない。

だがともかく「医師にガンノイローゼ扱いされたところで、社会的に名譽を失うわけでもなければ、一銭も損するわけでもないのだから、断固患者はそんなことを気にせず自衛しなければならぬ」と繰り返して訴えてきた私が、医師とそしてともと健康についての自衛心など持ち合わせぬ夫の言葉で、引き下がってしまったというのは、やはり油断というしかない。

そればかりか、真実肺ガンと判明した時には、「あれだけ肺ガンではないかと訴えてきたのに」という口惜しさと同時に、「ホントに肺ガンだったなんて……」と感じたのである。自分の体験さえ、十年たてば他人事なのである。

それに、早期発見のチャンスを逃がしたら医療側になんの打つ手も無いのも、まるっきり昔と同じで、ガン死は年々増えていくばかりである。今さらもう何も語りたくない、死ぬ人は勝手に死んでくれというのが、彼の死後何カ月かの私の心境であった。

実際、今度という今度は、私もまいった。非常識とは知りつつもいまだに離す気になれずにいるお骨だが、そのお骨に向かってずっと朝晩、相談ごとや報告やと話しかけ、彼の応答に心を澄まし、毎度食卓にも招び、彼がそこにいると同じように振る舞ってきた。ママゴト遊びで自分を甘やかしているのだと、よくわかつてはいるのだが、そんなふうにでもしなければ正常な精神状態を保てなかったであろうと思える時期も、確かにあった。

夫が死んで二月ほどは、彼はもうこの世のどこにもいない、彼という存在は無に帰したという思いに襲われる度に、両の手で抱え込まずにはいらぬほど胸が痛くなり、日に何度もヘタヘタ

と台所にでも階段にでも坐り込んだ。船山馨夫人のように、夫の死とともにこの世を終えることのできた人が、しんから羨ましかった。

夫の四十九日の前々日には父も突然死に、この年齢になっても甘ったれることのできた二人の間が、ひと夏のうちにスポッと消えてしまったのである。

秋口までは四時間も眠るとききまって、夫が死んでいく、あるいは死んでしまつて悲嘆にくれる夢でとび起き、明け方から泣いてばかりいた。だが年を越すと、夫はあの世から足どりも軽く、はればれと眉を開いた明るい顔で眼鏡を作りに来たりもした。ある時はテレビ局の報道の大部屋のざわめきを、ある時はマージャン屋のジャラジャラをBGに、「僕ですけど、今夜の食事はなにあに？」と、二十余年の毎夜決まつた台詞で電話を掛けてきたりもするようになった。

そして一年余りを経た今では、夫は私の身边にそこはかとなく在って、やわらかな眼差しで私を見詰めていてくれるように感じられる。今でも夫の机の上は、突如入院したその日のままに、そつとからぶきをかけるだけである。遺体となつて帰宅した夫を三月ぶりに寝かせた布団は始末する気になれず、私の手で縫い直し、日光をたっぷり吸わせては彼のベッドに整えてある。ある日夫がふつとそのあたりに居たとしても、私はちつとも驚かないのではないかと思う。

こうして、あの、「身も、世も無い」とはまさにこのことかと実感した悲嘆の日々は、少しずつ遠のいていくかようである。

時の経過のせいでもあらうし、穴に籠りきりの私を引っ張り出そうと努力し続けて下さったまわりの方々の愛情のおかげでもあらう。私の気持ちも徐々に変わってきたのである。何もかもあ

やうく、はかなく、むなしいと感じる、大げさに言うなら「色即是空」の心境から、徐々に、はかない存在だからこそ、誰もが幸せな確かな時を大切にしてもらいたいし、そのはかない存在同士縁を大事にしたいという思いが、甦^{よみがえ}ってきた。

幸せに満ち溢れた家庭を突然襲う、この現代にも克服されざる悪、ガンへの惨敗の記録を、縁あって他人事と読み捨てずに活かしてくださる方があるならば、「君、たとえ一生に一人でも、人の命を救えたら、それは素晴らしい一生と言えるよ」と常々私に言い、心底、人が好きだった夫の供養になるのかもしれない。

悔いてやまず 目次

はじめに

第一章

一 力の無い咳 15

二 肺には異常無し 19

三 幸せの最後の日 25

第二章

一 突如潰れた左肺 33

二 縫い代しろが無い 38

三 私が先のはずだったのに 42

四 闘い方を模索する 45

五 夢に苦しむ 52

六 十五年もベッドに 57

七 ケンカも出来る幸せ 63

八 仕事をどうするか 69

九 空気が通い始めた 77

十 潰死した左肺が…… 81

十一 手術でもしやウマイことに 85

十二 幸せの定めなさ 91

第三章

一 心臓まで捲き込んでいた 99

二 すぐにも死が 104

三 つらいこの新緑の季節 111

四 出世したねえ 115

五 夜間看護にみる行政の矛盾 121

六 死後の処置用 126

七 奇跡が起きた 132

八 やはり決壊した 137

第四章

一 過去を思わず、先を思わず 143

二 手鏡にうつす月 148

三 幻覚事件 155

四 薬にもすがりたい 164

五 僕は必ず乗り切る 171

六 終わり方は生き方で 178

七 人格なんて、今はそんな 184

八 さりげない人 190

九 私がもつと丈夫だったら 198

第五章

一 看護って心なのね 205

二 本人よりまわりが 214

三 ほんとうのやさしさとは 223

四 もう少し時間がほしい 227

五 再手術に向かつて身体ならし 233

六 私は夫を翻弄しているのでは 240

七 闘い抜くことこそ人間の尊厳 250

八 心は殆ど平常のままに 254

あとがき

悔いてやまず

装幀 長峰八州男

第一章

